コスモス

41

第 4 次
1983. 6

政治詩人の結末

西 杉夫 38

前号作品の感想

河合 俊郎 14

●はなしの自由席

仁川と江界の距離

村松 武司 19

その人に

松永 浩介 21

捨て子

宮田 正平 22

詩集『おんなの本』と鈴木文子さんのこと

吉田 欣一 23

●詩

秋山 清	7	長谷川七郎	17	野口 清子	32
村松 武司	8	木原 実	18	河合 俊郎	33
伊藤 正斉	9	押切 順三	26	仙石まこと	34
西 杉夫	10	小宮 隆弘	26	寺島 珠雄	35
暮尾 淳	11	坂上 清	28	宮田 正平	37
和田 英子	12	近藤 計三	29	山野 千エ	48
緒方 宗平	15	本田 晴光	30		
申 有人	16	高島 洋	31		

●コスモス雑記

2 ~ 6

定価
五〇〇円

この一年

木原 実

この四月で退院して一年になる。この一年はもっぱら右片マヒという名のカタワの生活になじむことであつた。

おぼつかないながらもマヒした右足には装具をつけて、ピッコひきひき電車にもバスにも入る。萎えた右手にかわつて左手が、ハガキぐらいの文章をかか。一番困るのが言語の障害で、なかなかスムーズとはいかない。カタワも一人前になるには、とても一年や二年でどうなるものでもない。

「きみの幸運だつたことは、頭をやられなかつたことだ」と、吉田欣一は親切に書いてきてくれたが、頭もそれなりにやられている。リハビリのときは幼児の絵本をよむ

ことからはじめたのだから。そして発病二年近くなのに詩が書けない。

詩がかけないということは、精神的な立直りが十分でないせいだ。発病十ヶ月で退院する前後に短歌をかく力がよみがえつた。それから一年短歌はスムーズにかける。詩を心にかけていても連作の歌になる。ぼくの歌は現代語・自由律で定型ではない。しかし大事なときに詩がかけなくて短歌だけがかけるといふのは、やはりアタマの、精神力の問題のようにおもわれる。

詩をかくことの言葉や思念の緊張にまだ耐えることができないのである。ところが短歌となると、その緊張を短歌の形式というものがあていと救つてくれる。散文的な自由律・現代語の短歌でも、短歌という様式に変わりはない。定型を破つて、自由律・現代語の歌が短歌としてなりたつたためにはやはりいくつかの暗黙の約束のようなものがある。私はそれをかりに「短歌の様式」とよぶのだが、ともかくそういう約束ごとを胸にたた

んでやれば、歌はその様式に形式にたすけられてスムーズにできる。(という側面もある)。

詩がかけなくて一年ばかり短歌だけを書いているのも、しよせんアタマと精神力が弱つて、形式におんぶして感傷や抒情に走つていくだけのことである。

こういうことだと詩をかいても様式にもたれただけのものに終るだろう。詩をかく上で大事な(現実との格闘)の精神をとりもどすのはいつのことか。仕方がないのでこの頃はマヒした足に装具をつけてシコシコと近所を歩きまわり、やがてこの足がヤブでも泥んこみちでもふみこえるようになったら、詩らしい詩が書けるようになるかもしれないと思つたりしている。(一九八三・二)

病床記

伊藤正奇

えごいものがぬるつとこみあげてくると、次にははげしい咳がは

じまる。咳こんでも気管支からはなかなか痰はとれてこない。二十回か三十回痰が出てこないとおさまらない。それがおさまると二時間ぐらい安息のときがくる。その間は大方ねむる。トイレへ行つたとき、食事の後も、発作がおこるようになったのは、最近のことだ。

発病した当時(仕事のできなくなつた時点)はものを食うと発作がおさまつたものだ。どうしてもおさまらなくなると、入院ということになる。入院したくないからがまんする。がまんすると三十六キロぐらいに体重が減つてしまふ。そんなことがかさなつて、入院するたびに、入院日数が多くなつてしまふ。

窓の外の窓業工高の桜のつぼみがふくらんできたが、まだ退院できそうにない。去年六月以来のことだ。その間に女房どのの急病で一ヶ月ばかり付添に他の病院で暮らしたが、それがこたえて、長い病院生活になつてしまつた。

それでも、正岡子規の病状のことをおもえば、まだ私の病氣など

はもの数ではない。子規はそんな病床で立派な仕事をし、数多くの、すぐれた後輩を育てた。私といえは詩のようなものを書きなぐつて、ひたすらあそんでいるのだ。私の病床には、文学をやるような人はたずねてこない。訪ねてきてくれなくてもいい、などと負けおしみなど言わないけれど、決してさみしいことはない。ただ自分の経験や体験のなかに、何かを徹底的に、つきつめてやり通したというところがなかつたことは、さみしいことだ。

和久太郎の「獄窓から」を読んだことから、アナキズムを知つたがなまかじり。河上肇の「第二貧乏物語」を読んでマルクスに影響されたが、これもよく勉強したとは言えない。文学の方はどうかと言え、乱読でままとつたものを読んだことがない。若い一時期、私は教育宣伝部長などという肩書きをもらつて、絶体これこそが正しいとか、断固としてまちがいないとかいう言葉を口走つていたことを今、にがにがしく思い出

て忸怩たる思いである。それでは今はどうだと言われても答えようがない。

核抑止力というやつをふりまわして、すべての生物を皆殺しにするような競走をつづけている二つの帝国主義、おろかな人間どもが目に見えるばかりの、そんな絶望のなか、死に近い私の身近な風物は、それだけに、新鮮なおどろきとして、今日に映つてくる。

内田博にことよせて

緒方宗平

内田博が亡くなって二年たつた。京都ででている「煙」四四号は内田博追悼特集号になつている。

そのなかの「声」で内田麟太郎が言っている。秋山清さんが見舞に行つて下さつたが内田博は面会を断つたそうです。老醜を晒したくなかつたのでしようかと。律義な内田博のことだから多分深い遠慮からだつたのだらうか。ところで、それにちなんで砂木

のことがうかんでき。前にコスモスにもいたことのある砂木宗治のことである。内田博が手術をしたのと前後して砂木も手術をした。おもうが、手術のことになるとどうもはつきりしない。手術の前に内田博の手術のことを私は砂木に話したような気がするが、砂木の場合は肺ガンだつた。あとでできたところによるとながい時間がかかつたらしい。手術のほうはうまくいき、経過もよく一ヶ月かそこらで退院したのではなかつたかと思う。手術のあと痛みが残るといつていたが、見かけによらず芯の強いところがあつて、すくなくとも私の前で苦痛を訴えることはしなかつた。そのことではうまく退院したが白内障の手術で入院した。新聞もテレビもだめだとこぼしていたが、その目のほうとも、肺のほうともちがつた別のこととで去年の暮れにまた入院したら

た。いつもかかつてくる電話がなかつたが、いままでにもないこと

ではなかつたし、だが気にもなつて三月のはじめにホームに問合せでそれがわかつた。わかつたところで病院に電話をしたが面会できぬということである。病院そのものが普通の病院のように気易く行けるところでもないのていまだいってもいいが、どうしているだろうか。

私は加入していないが九州詩人会とかいうのがあつてその詩人祭が宮崎であつた。そして内田博が加入して宮崎にきた。その時はじめて内田博にあつたのだが内田博のことは知らず私の場合は初対面という気がしなかつた。翌日その時も入院していた砂木を二人で見舞つた。暑い日だつた。内田博が亡くなる一年か二年か前のことだつた。 1983. 3. 23.

喫茶店考

仙石まこと

詩を書く時は必ず喫茶店で書く。手紙を書いたり、本を読んだりす

るのも、ほとんど喫茶店である。

たとえば今、私は自宅の近くのピ
オットという喫茶店でこの文を書
いている。ピオットはブレンドを
二種類おいている。ソフトタイ
プとほろ苦。私はいつもばいせんの
強いほろ苦を注文する。B・G・
Mはいつもクラシック。しかしこ
こにはめったにこない。長時間ネ
バリにいくからだ。たいていは線
路を渡ったコロラドに行く。コロ
ラドはたいがい満員であるが、奥
の二人席にいれば、めだちにくい。
ここで以前エスプレッソをよく
たのんだ。

最近時々行くのがナッツベリー。
スタジオのように明るく、白い色
がトーンだからよいにめだつ。
だがこれも四人席しかなく、一人
ではねばりにくい。地中海は二十
四時間営業。いつもすいている。
もつともここは終電で帰った時や
朝帰りの時、ふらっと寄る。コー
ヒーはUCCでまずいから、いつ
も注文はミルクティー。他家の
近くで行く喫茶店はれんげ、バル
カン、オカノ、珈留茶など。

毎日帰りに寄るのは珈琲。ここ

ではカウンターにすわって、マス
ターとしやべるのが日課。マスタ
ーの本業は牛乳店、朝配達をすま
せて、昼すぎから店を開く。六十
七歳ピンピンである。政治、経済、
宗教、と話はとまるところを知ら
ない。

会社の近くでは、昼に必ず行く
のはリヴィエラ。ホットドッグと
ミルクティー（これもコーヒーが
まずいから）をたのみ本を読む。
ここへくるのは砂糖の他にサツカ
リンが置いてあるから。糖尿病人
私にとつてはねがつてもないこと
だ。

三時に休けいするのがシェール。
ここほど無愛想な店もないがすい
ているから行く。あと以前行つて
いたのはドスルック。ここでは
以前毎日昼利用し、一日に必ず一
篇の詩を書いて、一冊の詩集「メ
ランコリー・キャフェ」にしたこ
とがある。あと会社の近くでは、
コーヒーのまずくない店の唯一で
あるデルソーレ、他にブックエン
ド、コクリコ、オダカ、ミナミな

ど。

池袋では、私の親友と会つたと
きに利用するシャンソン喫茶ボヌ
ール。ここはすいていてねばれる
感じだから。古い店としては東口
のコヤマ珈琲寮。ここは列車のよ
うに細長い店でコーヒーにはミル
クのかわりにクリームがつく。他
で古い店といえば、西口の象の仔
わりとまじなフレッシージュース
がある。もう一軒、珈琲が休みの
時寄る店亜麻亜亭、このコーヒ
ーはまあまあだし一人席があるか
ら本も読める。いつも満員で、し
かも回転率がよい。もうけるな
つ！

悲しくむなしく

寺島珠雄

「宣言」という詩の雑誌は一冊や
二冊見たことがある程度で知らな
いまでもそれに変りはないのだ
が「プロレタリア詩雑誌総覧」と
いう便利な本で総目次を見て、私

には大発見なることを拾い出せ
たので書いておく。

便利な「総覧」は伊藤信吉さん
と秋山清さんの編で戦旗復刻版刊
行会から去年の夏に出版。出たの
は知っていたが高くてあきらめて
いたのを、こんど秋山さんのおか
げで手にできたのである。

それによれば「宣言」は一九二
九年八月から三〇年十月までに全
十五号が発行されている。内野健児
内野郁子が編輯者であり発行者で
ある。

その第一巻第三号、一九二九年
十月号、次の十一月号、さらに十
二月号から翌年一月号とつづけざ
まに「百海操」の詩がある。百海
は「どうみ」と読むのだ。

私はこの百海氏と十年以上前か
ら文通していた。百海氏が上州高
崎の出身で、同郷の後輩吉本孝一
を最初にみちびいた人なので、吉
本を探究している私が教えを乞う
たのがはじまりだった。

その文通のなかで百海氏は、自
分がかつてプロレタリア・エスベ
ラント関係の事件で身を隠したと
造三の人間と、詩人としての全体
像を掴むことができる。

それにしても、この終章を読ん
で驚いたのは、竹内浩三は、足立
氏によって最初に知られ、その資
料を蒐集して、浩三の実姉・松島
こう子さんに会って、浩三の遺作
や書簡の引用の了解を求めると
のお膳立てによって「兵士の詩」
「戦中詩人論」が世に出ることがで
きたということである。

ここでは紙数の制約で、肝心の
足立氏の「戦死ヤアワレ」の大半
に触れることができないのが心残
りであるが、機会を改めることに
する。せめて、最後に浩三の問題
の詩を紹介しよう。

アア

戦死ヤアハレ

兵隊ノ死ヌルヤアハレ

コラヘキレナイ

サビシサヤ

国ノタメ

大君ノタメ

死ンデシマフヤ

ソノ心ヤ

げられてどうしても読めない。
今年、私は「年賀欠札」の事情
があつたが、百海氏は病床にいた
のであろう。大発見であり悲しく
てむなしきことだ。 83・3・31

兵士の詩

宮田正平

それが「総覧」で、題名だけな
がら四篇もわかつたのだ。
いい詩を書いていたが無名のま
まビルマ戦線で死んだ吉本孝一に
とつて、萩原との関係は気をつけ
ればわかるが、その前に百海氏か
らの影響を見なければならぬこと
がこれではつきりしてきた。

私の吉本孝一探究は二月に創刊
された伊勢崎の詩誌「幫」（小山
和郎編集発行）に載せてもらい、
五月に出る「わが詩人考 アナキ
ズムのうちそとで」（編集工房ノ
ア発行）にも入れたが、百海氏関
連ではなお増補する必要が生じて
きたわけだ。

しかし「幫」を送った私への返
信は初見の女名前のがきで、百
海氏はこの一月二十五日に死去し
たとあり、女性の住所は消印に妨

今月の初め和田英子さんから手
紙を貰つた。柄にない毛筆での手
紙に対する返信で、別に用事のあ
るものではなかつたが、中に「足
立巻一さんからのハガキに「宮田
正平さんが拙著《戦死ヤアワレ》
を読んで下さっているのを知り、
驚きかつ嬉しく思いました。よろ
しくお伝え下さい……」とありま
した。お伝えさせて頂きます」と
あり、ちよつと不審に思つたが「コ
スモス」40号の「前号作品評」の
冒頭で、《戦死ヤアワレ》の書名
に触れている。和田さんが「コス
モス」を送っているそうなので、
40号を見て知られたのだらう。

ところで確か一昨年十二月頃

桑島玄二氏が松阪でNHKの文化
講演会で引用された「戦死やあわ
れ」という詩が感動的だったとカ
ミさんに聞かされ、ぜひ読むよう
言われ、桑島氏の住所を調べ、そ
の《兵士の詩》の書名と発行所を
問い合わせた。ハガキでの舌足ら
ずな訊ね方だったせいか、「講演
の版權はNHKにありますので、
ご期待に添いかねます」という返
事だった。

何とかその本を探す方法はない
ものかと思つていた矢先、勤め先
の新聞の中から見つけたといつて
足立巻一氏が朝日の文化欄に「人
間愛こもる戦争詩」と題して「戦
死やあわれ」の作者・竹内浩三の
ことが書かれているといつて、カ
ミさんがその切抜きを持って来て
くれ、さらに昨年九月、足立氏の
「戦死ヤアワレ」を買って来てく
れた。この本の終章《戦死ヤアワ
レ》で、僕の探す本が桑島玄二著
「兵士の詩」戦中詩人論である
こと、理論社の発行であることを
知ることができた。前の足立氏の
新聞の記事と併せて、これで竹内

寄らば大樹の蔭

近藤 計三

四月から、やっと劇場関係の仕事から離れられることになった。

この劇場の創立五周年目ということで、日本ではじめての公立の演劇学校を発足させるということや、また自主事業の催しものをふやしていくなどの企画があつて、ともかくも演劇学校の構想から第一次選衛試験まで立ちあつて、もうこれ以上ではぼく自身の身がもたない状況を意識しただけに、ちよつと強引にやめることにした。

演劇学校の構想は、定員五〇名で青少年対象の演劇リーダー養成という目的であつたが、応募者が三〇〇名弱あつて、いきおい競走率の高い選衛となつたのは、仕事をしていたぼく自身があつけにとられるという仕儀であつた。現実認識がズレているといわれればそれまでだが、この選衛で、山崎正和、秋浜悟史を中心としてつく

「消息」

▽いつも几帳面に、毎号の原稿と同人費を届けていた秋田の北本哲三君の消息が、今号にかぎり何の音沙汰もなく過ぎようとしていた。思い切つてハガキを書いて出したら折返して、「網膜剝離という面倒な病気のために遅れたが、今は快方に向つている」との知らせを受けてホツとした。

▽左手一本でクレヨン画を描きだめて展覧会も開いた木原君が、その後の努力をつづけて、外出も定期的につづけているという。千葉県船橋からこの消息を得て、人間に対する期待のふくれる思いをした。今号にも二、三のものを書いている。

▽秋山清は五月中旬に大阪、神戸名古屋と歩いて、同人諸君とも逢い、さし迫っているコスモス・アンソロジーについても語つて来た。もつとも古い小野十三郎や、吉田欣一、高島洋、の諸君、和田さんや寺島君、近藤君とも、そのことについて現在までのことを話してきた。(秋山)

られた入試課題に八〇〇字以内で

「私と演劇」という作文があつて、その採点をもう一人の演劇学専攻の教授と担当させられたが、まあ出題も抽象的課題ということであるにしても、舞台でフットライトを浴びてスターになりたいという夢の多いのは依然として多くあつた。まず、自分の娛しみのために舞台に出たい、厭になつたらさつさとやめる、とは若い演劇青年からよく聞かされていて、それも自分自身のためということで納得はしていたが、作文を読みながら、それもしよせんは「目立ちたがり」の意識で、他人がいつも自分を好い子にしてくれないなら厭だ、というしかないのだと改めて痛感させられた。無名性というような苦勞なんかゴメンという意識が、こんどの「兵庫県立」という国公立意識に結びついてワンサカと応募者が受験にきたのは、いまの大学、高校の入試風景と同じという他ない。寄らば大樹の蔭であつて、この企画に一枚噛んだぼくとしてはいま複雑な気分である。

そのジャンルの方法と関心は違

うだろうけれど、大阪文学学校が生徒募集に苦勞していることなどを考えると、税金という予算に保障されて、またそこに信頼度をやすやすと寄せてくるのをみていると、行政の文化への積極性をそう短絡的に批難するつもりはないが、そこに権力機構の組織に吸い寄せられていく感情の怖さもまた抱かすにはいられない。

ちよつと、かつて中島健蔵と中野重治編の『戦後十年 日本文学の歩み』(昭和31年刊)を読み返して、中島が戦時下の転向問題にふれ、中野と平野謙、荒正人の主体論争に、もちろんその主体性の自立を認めながらも権力組織に対する組織を戦後まっつきに考えていた発言をしているのに改めて刺激される反省があつた。

あいらしい孫

秋山 清

どたんばたんと素晴らしく
ただいま成長をいそぐ。

それがあたりまえ。ちくしよよう。

孫は二人の男の子だ。

幼いやつらの欲深、気まま。

身勝手がこつちを向く。

甘える時はお母さん。

時にとつての笑顔で

う、そもけんかも抜かすんだ。

一杯食わされることの よもやが

めずらしくなくなった。

途方もないいんちき。企み。

マンガの引っぱりっこ。

テレビ独占。

殴りあい。わあわあ叫び。

ちびも負けるな。

声援してやるぞ。

はるかに子供ちゅうもんは

世間の何かがわかつていて

小知恵もはたらく。

十年くらい素飛んじゃうよ。

親も自分をひきしめて

その必要ありだ。

あいつは今年六年生。

ちびは二年か。

小憎らしく顔つき出して

おじん。おじん。

今日の寒さ。

春雪がべたべた降る。

少年のナイフ

村松武司

夜更けて、鬚の鉄幹ふうの男が帰る。
風やんで、汗ばんだ掌を膝で拭きながら
あかりのしたの地図をみる
いまは姿を変えただろう過ぎた日の街
もういちど城門からはじめて
崩れた牆壁を匍ってゆく
そこに病院、フランス教会があって
鎖国がひらく
山すそは土幕民の部落、きわめて抽象的に
アジアの眠りがみえる。

鉄幹の飲みものこのコップ酒よ
ひとまず、とつぶやいておれは流しこむ。
孔子廟の風鐸はやまず

岡のうえで風が回転する、回転する
土幕チユマクから通勤する年上の女の
白い額を映していた鏡の前に、ある日
少年が小刀を置く
おれは心臓のふるえを耐えるだけで
女の一瞥から半年たって
とうとう本物の軍刀を吊ってしまった。

鬚の鉄幹は夜来て、消える
机のうえに植民都市の古い地図が残される
廢市から飛びたつ鴉が
おれの頭上に翼をたたむ、腹を掻く
うろつきまわって部屋の際に眠り
おれは尻のあたりから腐るようなかたちで
廢市の夜を醒め明かす。

とうに失効したのだよ
多くの女たちがそれぞれ勝手に恋人を持って
ある日とつぜん、パパと呼びはじめる。

暮れなんとして暮れぬ停止
おれは部屋にこもって
古い週刊誌などを繰る
きのうは集会で、なにか憲法について
はげしく語ることがあったにしても
いまは暮れなんとして暮れぬひととき
机のうえに秋の陽をうつす小刀ひとつ。

回復

伊藤正斉

手術のすんだベッドがエレベーターから出てきて
カルテを抱いた車椅子の人が下へおりて行った。
黒いサリーの女、
ファッションのステージからぬけでてきたような、
あでやかな人たちが扉のなかへ消えて行った。
ここは国際ホテルのロビーではない。

—あなたは病後だから飲めないでしょう。
ビール瓶をもって話しかける私に
—いいえ、わたしもいっぱいいたたくわ
とコップをさしだした。
もう二、三ばいも飲んだような、ほのぼのと上気
した彼女の頬をみつめながら、ビールをみまし
た。
彼女は一口口飲んで
ああおいし、とって私のコップにビールを注い
だ。

一枚の皿がそのとき目の前をよぎって、
赤い電車の通過してゆく窓の外へ消えていった。
彼女はテーブルスピーチをするために、
びっこをひいてマイクの方へ歩いていったが、
完全に回復していた。
回復のぞみのない私は、
びっこをひいていく彼女のうしろすがたを追いな
がら
自分のコップにいっぱい泡をこぼした。

傘もささずに

西 杉 夫

降りやまない夕立のなかを
青年は歩いていた、
傘もささずに。
くろずんだ麦わら帽から
とめどなく水滴がしたりおち
やせた肩はぐっしよりぬれている。
人力車のうえから娘は見る、
いきなりしぼんでいく心がある。
あの日、嵯峨野、嵐山、
京へもどる夜道の深々としたひろがり、
ほとぼしる青年のことばは
はげしく押しよせ、つつみこみ、
娘は酔ったようについていくばかりだった、
とりつきようもないほど高いものへの
それだけになおわきあがる熱さのまま。

すりへった下駄で水しぶきをあげ
まっすぐに前を向く青年の
青白さ、小ささ、

娘はずんと沈んでいく。
のしかかる体制につっかかり
渡良瀬川ときけば青年はとんだ、
見て、怒りたち、鉾毒を叫んだ声は
娘を一瞬にさしとおす。
遠くからでもあざやかな生家の白壁、
村人のほとんどが小作人、
そんな大地主の娘と
父が武士だった青年の
生まれ育ちのへだたりを
いっきにこえて
まっすぐ赤々と結び合わせたもの。
だまって娘はすれちがう、
青年は気づかずにぐんぐん進む、
雨に消えていく。
ゆれうごく心のままに

娘はうつむいてふりむかない、
その奥底に
だがもうひとつの思いがまた芽生えようとしている。
いま 志知文字
やがて 松岡文字。
明治を反逆に燃えながら
燃えつきていった青年の二五年、
傘もささずに
松岡荒村 雨のなか。

食えばいい

暮 尾 淳

ネズミ算というじゃないか。
まるまる肥えたのを飼育して
食えばいい。
太古からの
ゴキブリも、
黒飴色したのを養殖し

フライ、天ぷら、その他、
黄や緑の野菜を添えて。
高層ビルの展望レストランで
ワインを管めながら
その人はいう。

世界の食糧危機とは
牛や豚をモチーフにした美学の演出である。
詩人こそがそのドラマツルギイを破壊するのである。
エコロジイと人類繁茂について、
しかし話はそこまで。
ホロホロ鳥の最後の一切れを
口に運ぶと
その人はぐらりとゆれる。
見おろす薄暮の街には
ネオンが瞬き
風がざわざわ鳴っていた。

春あさく

和田英子

突如として言う

五十五才以上の出向管理職全員に
退職勧告が届いた噂は
きいていた

とっさの返事はおくれ

遅かれ早かれ。退職金の上乗せが。

勤め先はあって。

などという言葉は消して

会社のやり方は少々

声をひそめて答えるばかりだ

長年来

目顔で挨拶するか

しないか

とおく距たったMが

あと もうしばらくです

卒業証書をもらいましたよ

うすい空気を吐き出し

会社に在籍のまま

下請企業に転出したMは

作業服を背広にかえて

月に一、二回やってくる

独身寮にいて

ガリ版の綜合同人誌を

編輯 発行していた頃と

変らない

短軀 童顔

紙カブトが似合う

面持ちを

しばらくためらったあと

十三ヵ月繰り上げ卒業です

叫んで

わたしのうしろを

通っていく

Mの肩に

スクラップの鋼材が

つきさざっている

廃材におりたつかメモの

動かぬくろい眼

数え年二十才のMは

かの一とをまつ

まどべによりて

じょうじょうのしらべ

とほくききつつ

『まちびと』をうたい

同じページ

アカシヤの匂ひに

ふとかぎつけた

失はれた目目

『少女の日』を綴るのは

素木冬子というわたしだ

褐色に褪せた

同人誌一冊

バックナンバー揃っていますか

問わず

風花のなか

Mを見送る

組合報が雇傭延長の獲得を

喧伝する

きのう今日

見知った

A、G、T、H、各氏の

退職回章が

机の上に

ひらりと落ちる